兒童研究法講義（七）

第四高等學校教授　松本金壽

幼兒の言語

一

發達を身體の方面と精神の方面とに分けますならば、歩行動作は身體の方面における發達卽ち成長の目印しですし、言葉の理解と表現とは精神の方面における發達卽ち叡智の始まりだと云ひませう。人間が動物と異る點は言葉と道具の使用とにあると云はれますが、この意味から云つても、歩行と言語とは本當に人間的なものと云ふことが出來ます。子供を育てた經驗のある人にとつて、自分の子供が歩き始めた時と言葉を云ひ始めた時とが最も印象的だと云はれますのも、恐らくは、この二つが最も人間的な身近さを感ぜしめるからだと思はれます。身體動作の發達については前號で大體述べましたから、今度は精神發達の代表である言葉の研究法を述べることに致します。

兒童の言語表現は生後一年目頃から始まるのが普通ですが、それから數年間の發達には實に目覺しいものがあります。一年目頃には僅か一語か二語といつたやうな辿々しい片言混りが、幼兒時代の數年間に一通りの言葉使ひが出來上るといふことは、それが餘りにも自明なことであるだけに、誠に驚異すべき問題だと云はれませう。私共が外國語の學習に費した年限と結果とを比較されたならば、このことは一層明白になるでせう。

尤も言葉が人間の生涯にまつはる不斷の文化財である限り、言葉の研究といふものは、何も幼兒時代に限つたわけではありませんが、發達といふ點からみると、幼兒時代が

一番大切です。進化論で有名なダーウィンは「全人を中において我々が成し遂げたことの中で、初めて言葉を使ふことを覺えたといふこと程、大きく且つ驚くべきものはない」と述べてゐますが、しかも此の大事業が大體において二歳から四歳までの三年間に略〻完成される次第です。我が國の兒童語研究に先鞭をつけた久保良英博士は、幼兒時代における目覺しい言葉の發達を花に譬へて、二歳は蕾の時期、三歳は半開の時期、四歳は滿開の時期だと述べられてゐますが、發音の點でも言葉の組合せの點でも、五歳以上になれば自由自在だと云つてよいでせう。身體動作の方向においても、幼兒時代の發達には目覺しいものがありますが、一人前の充分さといふ點からみると、言葉には到底及びません。

大體以上のやうなわけで、幼兒の言葉は昔から色々の人人に興味を持たれ、實際に觀察したり實驗したりした研究は、とても數へきれぬほど澤山あります。大正以後、今日までに發表された我が國の研究だけでも五十以上に及んでゐます。こんなに澤山の研究があるのに拘らず、まだ〳〵足らぬ部分が澤山あります。まして皆さんが保育の實際に當つて當面されるやうな具體的な問題に對しては、此等の諸研究が、すぐそのまゝ役立つかどうかは頗る疑はしいと思ひます。結局は皆さんが各自各樣の立場から、獨自の解決に進まれる必要が起りませう。そんな時の御參考までに、次に研究法の大要を述べることに致します。

幼兒の言語發達に關する主な結果だけでしたならば、私が以前に發表した次の論文を御參照下さい。

兒童の言語（岩波講座「教育科學」）

兒童語の表現（明治書院「國語科學講座」）

二

言葉の働きといふものは、自分の表現が相手に理解されることによつて初めて成立つものですから、理解と表現とは言葉の働きの二要素とも考へられます。どんなに美しい表現でも相手に理解されなかつたら何もなりません。殊に幼兒に對しては、このことが一層大切な意味を持つてゐます。熟練した保育者であるかどうかは、幼兒に對する物言ひ振りでも察せられるわけです。言葉の働きとしての理解と表現とは、上のやうな意味で大切なだけではなく、幼兒の言葉の發達に對しても、極めて重要な役割を演じてゐる次第です。といふのは、幼兒の言葉は周圍の大人達の言葉、といふよりは大人達から話しかけられる言葉の理解から出發するわけですから、具體的でよく分るやうな言葉を與へることに、言葉の發達を促す重要な條件と云ふことが出來ます。理解は表現の母胎だといふのは、斯うした事實を指してゐるわけです。それ故、幼兒の言語の研究法も理

解と表現との二つに分けて述べることに致します。

三

幼兒がどの程度の言語理解力を持つてゐるかとそのことを研究する方法は、個々の語の意味の理解と文に表現された意味の理解とに分けることが出來ます。

先づ個々の語の意味の理解力を調べる方法としては、指示法と定義法とを擧げることが出來ます。兩方法とも幼兒に對しては一人々々について卽ち個人的に行ふのが普通ですが、定義法は團體的にも行ふことが出來ます。どちらかと云ふと、指示法は年齢の低い方に、定義法は比較的に年齢の高い方に行ふのが本筋です。

指示法といふのは、一定の事物や繪畫等の中から、實驗者が呼んだ名前のものを幼兒が正しく指示できるかどうかを驗すことによつて、個々の語の意味の理解力を推定する方法です。よく一般の家庭で行はれてゐる「これ何」〳〵式の命名法の逆の遣口です。ビネー・シモンの智能檢査法にも三歲兒の問題として、幼兒自身の鼻、眼、口、耳等を指示させる課題が含まれてゐますが、指示させる對象としては廣く色々のものを選ぶことが出來るでせう。玩具でも動物でも日用品でも、とにかく幼兒の經驗範圍のものならば何でもよいわけです。單に具體的な物ばかりでなく、「長い——短い」とか「重い——輕い」とかのやうな抽象的な概念關係にまで及ぼすことが出來、應用自在な便利な方法ですが、正邪善惡と云つたやうな直觀的でない言葉の意味を調べることが出來ないのです。これが此の方法の缺點でせう。

勿論この方法によつて研究する場合には、問ひのし方や指示のさせ方にも相當の熟練を要しますし、又繪などを用ひます際には明瞭なものでなければなりません。粗雜な通り一遍の調査だけでは、精確な結果が期待されないことは云ふまでもありません。一方において、相手は倦き易い幼兒だといふことを絕えず念頭に置くと共に、他方において、暗示を避ける意味での嚴格さが保たれなければならぬと思ひます。

定義法は讀んで字の如く、色々の語の意味を幼兒に質ねて答へさせる方法です。この方法はあらゆる種類の言葉に適用できるわけですが、答への內容の整理が大變です。勿論、幼兒に求める定義內容は、私共大人に求めるやうな論理的な概念規定ではありません。大抵の場合は、語の意味の云ひ換へ又は說明と云つた程度のものですが、それにしても大體の整理目標を立てゝ置かないと始末がつきません。然し、この方法を用ひた研究は可なり澤山ありますし、ビネー・シモンの智能檢査法の中にも幾つかの雜形が出てゐますから、前例にはこと缺かぬと思はれます。

指示法と定義法とは、以上述べましたやうに、特定の言

澤柳政太郎、田中末廣、長田新「兒童語彙の研究」
千葉縣鳴濱小學校職員研究會「新入學兒童語彙の調査」
岡山縣師範學校附屬小學校「兒童の語彙と教育」

四

次に文の意味の理解力についての研究法に移りませう。元來、文は語の母胎であるばかりでなく、一切の言語的交渉の基礎をなすものです。それですから、文の意味の理解といふことは、あらゆる場合に自明のことゝして前提されてゐる事柄で、特に取り立てゝその理解力を問題とするのは、大抵それを通して推理力とか綜合力とかを見る場合が多いやうです。簡單に要約すると、次の三通りになります。第一は、言語による命令を行動の形で實行させる方法、第二は、特定の數語を與へて、それを文の形に完成させる方法、第三は特定の文を與へてその要點を答へさせる方法です。

この三通りの方法は、斯う第一第二と書きますと何か嚴しい感じを與へるかも知れませんが、實際は日常生活に始終行はれてゐる事柄なのです。子供を使に走らせることは第一の方法の具體化ですし、使ひ先の返事を報告させるのは第三の方法に外なりません。强ひて云へば、第二の方法つまり文章完成法だけが特別仕立てのものと云ひ得るでせう。然し、それだからと云つて此等の研究法が無價値なの

葉の理解力を調べるのが本筋ですが、特別の言葉の意味だけでなく、廣く一般の言葉つまり語彙調査に應用されてゐます。語彙調査は謂はゞ言葉の財産調べのやうなもので、こゝにも澤山の研究が出てゐますが、調べ方は目錄法と見本法の二通りです。目錄法は、幼兒が表現する凡ての語彙を記錄蒐集する方法ですから、一番確實な方法と云ふことが出來ますが、これにも一定の限度があります。幼兒が自由に活動するやうになると實行が難しくなりますから、精精二三歳までゝせう。見本法は、一定の事物や繪畫等を與へてその名前を言はせたり、又一定の語彙を與へてその意味や用法を質ねるものですから、指示法や定義法の應用とも見られます。見本法にも無論一長一短があります。割合に高い年齢まで行ひ得ることは一つの長所ですが、見本の選擇が中々難しいことゝ調査に非常な日數がかゝることゝ、つまり骨折が竝大抵でないといふことが缺點だとも云へませう。しかも見事この困難を乘り越えて、新入學兒童の語彙調査を完成した貴重な勞作が、我が國に三つも發表されてゐることは特筆大書すべき事柄と云はなくてはなりません。卽ち、第一は大正七年度施行の成城小學校兒童、第二は大正十一年度施行の千葉縣鳴濱小學校兒童、第三は昭和九年度施行の岡山縣師範附屬小學校兒童の理解語彙の調査で、皆單行本として發表されてゐます。

ではありません。それどころか、話方や聽方の問題は、幼稚園時代から躾の訓練をして置くことが必要でせう。文の理解力そのものでなく、理解の態度とか理解にふさはしい表現と云つたやうな問題の方が、より重要になつてきました。文といふと、すぐ文章が思ひ出されるやうに、これまでは文字の面の研究が主でしたから、話方や聽方の問題は今後の研究として、大いに皆さんの注意を喚起し度いと思つてゐます。

最後に言語の表現についての研究法を簡單に述べて置きます。幼兒の言語表現を研究するには兒童日記による系統的觀察法が最上の方法でせう。兒童語研究の聖書とも云はれるシュテルンの研究も此の方法によつてゐますし、我が國でなされた久保、高峰、城戸、大脇等の諸氏の研究法も同樣な方法に據つてゐます。二歲から三歲、三歲から四歲と年々の發達を調べるには、どうしても此の方法に賴らなければなりませんが、その中の細い問題は質問を行つて答へさせたり、自由聯想とか制限聯想とかによつて發表させたりする實驗的研究法が必要でせう。幼兒の發音の發達などゝ云ふ簡單な問題も、自然のまゝの表現だけに賴らないで、色々な語音の組合つてゐるものを云はせたりしてみることによつて、つまり前に述べた條件分析法を用ゐることによつて、一層精確な結果が期待されるでせう。私が行つた幼兒の發音調査の方法を一例として掲げて置きます。

初めに五十音の各々を含む物の名を云はせてみて、發音の歪みの多い語音系列の大體を調べ、次に其等の語音だけを語頭、語中、語尾に含ましめた物の名を云はせたり、歪みの多い語音同志を組合せて云はせたりして調べてみると、サ行音、ザ行音、ラ行音、ハ行音等が、日本の幼兒にとつて難しい語音系列だと云ふことが知られるばかりでなく、サ行音はタ行音に、ラ行音はヤ行音又はワ行音に、ハ行音はア行音に轉化される傾向があることが分ります。そしてこんな傾向も五歲までの問題で、六歲になると殆ど完全になつて居り、殘された問題はアクセントやリズム等の問題、つまり話方の技術だと云ふことが明白になります。發音の正しさと語彙の豐富さ、語彙の豐富さと、智能の高低等の關係も興味ある問題の一つでせう。とにかく、小學校入學時までに、四八〇〇から五一〇〇もの語彙を理解し、二二〇〇以上の語彙を表現するやうになる幼兒の言語發達は、幼稚園時代の教育に俟つ所が非常に大きいのです。それだけに理解の面でも表現の面でも、研究される問題は無限にあることゝ思はれます。標準日本語の確立は、これからの幼兒教育の大きな使命の一つですから、旺盛な御研究を切望して止みません。